

# 重訳版『内乱史』第3巻

——オクタウィウスの策謀とアントニウスの復讐——

アッピアノス（著）

ホレイス・ホワイト（英訳）

今居清綱（邦訳）

## 目次

訳文についての覚え書き .....	iv
『内乱史』第3巻 .....	1
第1章 .....	1
カエサル葬儀後の都——アントニウスが偽マリウスを処刑する——アントニウスが元老院をたばかる——アントニウスがカエサルの法令を改竄する——ブルトゥスとカッシウスが都を離れる——ドラベッラがシリア総督に、アントニウスがマケドニア総督に任命される	
第2章 .....	6
アポロニアの若者オクタウィウス——オクタウィウスがイタリアに到来する——カエサルの兵がオクタウィウスを喜んで歓迎する——オクタウィウスがローマへと向かう——オクタウィウスがカエサルの報復を決意する——オクタウィウスがアントニウスのもとを訪ね、談話を讀む——アントニウスの返答	
第3章 .....	14
アントニウスとオクタウィウスの不和——カエサルの地所をめぐる訴訟——オクタウィウスの人気の増大——ドラベッラがシリアに進む——アントニウスがマケドニアの軍の指揮権を手にしようと画策する——ドラベッラがトレボニウスを殺す	
第4章 .....	19
アントニウスがマケドニアの軍をイタリアへと移す——アントニウスとオクタウィウスの対立の激化——軍団副官たちが彼らの間を取り持つ——アントニウスがオクタウィウスの助けを得て人々からガリア・キサルピナを手に入れる	
第5章 .....	21
アントニウスが再びオクタウィウスを圧迫する——軍団副官たちが再度間を取り持つ——アントニウスの軍団副官たちへの返答	
第6章 .....	26
オクタウィウスがアントニウス暗殺を試み、オクタウィウスがこれを否定する——オクタウィウスがカラティアとカシリヌムで兵を得る——護民官カヌティウスがアントニウスに対抗してオクタウィウスに味方し、オクタウィウスがアントニウスと戦うつもりだと宣言する——カエサルの古参兵がアントニウスと戦うことを拒否する	
第7章 .....	30
アントニウスの兵の抗命とアントニウスによる処罰——オクタウィウスがアントニウス軍の不和を煽る——アントニウスの軍団のうち二つがオクタウィウスに寝返る——	

アントニウスがガリア・キサルピナへと出発する——オクタウィウスが元老院に軍務を申し出て彼らがこれを受ける——オクタウィウスの軍団の動き	
第 8 章 .....	34
アントニウスがデキムス・ブルートゥスにガリア・キサルピナ撤退を命じ、ムティナに退いたデキムスをアントニウスが包囲する——アントニウスを公敵と宣言するようキケロが訴え、護民官サルウィウスがアントニウスを支持してこれに介入する——元老院での議論——キケロの演説——ピソのアントニウス擁護演説——元老院がアントニウスにムティナ包囲の取り止めを命じる——アントニウスの返答——元老院がアントニウスを公敵と宣言し、マケドニアがブルートゥスに、シリアがカッシウスに与えられることを議決する	
第 9 章 .....	45
オクタウィウスが元老院の裁定を案じる——オクタウィウス、ヒルティウス、そしてパンサがデキムス救出のために進撃する——ローマでのキケロの活動——アントニウスと執政官パンサの戦い——パンサが負傷し、彼の兵が野営地に退却する——ヒルティウスが救援にやってきてアントニウスを破る	
第 10 章 .....	49
オクタウィウスとヒルティウスによるムティナでのアントニウス撃破、ヒルティウスの死——アントニウスがアルプス方面に逃げる——デキムスがオクタウィウスとの会見を求める——ローマでのアントニウスに対する祝勝——執政官パンサの死	
第 11 章 .....	54
カッシウスの挙兵とシリアの情勢——ブルートゥスがマケドニアでガイウス・アントニウスを捕らえる——オクタウィウスがアントニウスに和解を持ちかける——オクタウィウスがレピドゥスとアシニウス・ポッリオと接触する——オクタウィウスが執政官職を求め、キケロに同僚になるよう持ちかける	
第 12 章 .....	60
アントニウスがレピドゥスの傍らに野営する——彼らが軍を合体させ、ウェンティディウスがアントニウスに合流する——ローマでの驚き——オクタウィウスと元老院の関係が段々と冷める——オクタウィウスが執政官職を要求すべく元老院に兵を送り込み、それから軍を連れてローマへと進軍する	
第 13 章 .....	64
都での不安、元老院での告発の応酬——動揺する会議——元老院が抗戦を決意する——オクタウィウスが都の門の前に到着し、新手の軍団がオクタウィウスに寝返る——キケロが都を出立する——オクタウィウスがベディウスを同僚とする執政官に選出され、カエサルによるオクタウィウスの養子縁組が人々によって承認される	
第 14 章 .....	68
カエサルの殺害者に対する告発と裁判——元老院がアントニウスとレピドゥスに対す	

る宣言を撤回する——デキムス・ブルトゥスの逃避行——デキムス・ブルトゥスが  
捕えられ殺される

## 訳文についての覚え書き

本書は古代ローマの歴史家アッピアノスがギリシア語で著した『ローマ史』のうち、ローマでの帝政樹立に至るまでの内乱を記録した『内乱史』のホレイス・ホワイト（アメリカのジャーナリスト・経済学者）による英訳（The Civil Wars, 1899）を底本とし、これを日本語に重訳したものである。今回の分冊は全5巻のうち第3巻である。

なお、この巻の英訳の末尾にはアントニウスがキケロに宛てた書簡の英訳が付録として収録されており、この手紙は『ピリッピカ』第13演説（10-21）中での引用という形で現在に残っているものである。当該演説の邦訳は『キケロー選集3』に収録されているため、すでにラテン語原文からの邦訳があるものをわざわざ英訳から新たに訳し直す必要性は乏しいと思われたため、この邦訳では省略した。

そして本書を読み進めていただくにあたって凡例的な点をいくつか記しておく。

(1) 本書の目次の各章にある小見出しはギリシア語原文ではなく、底本にあるものである。このうち一部の見出しは必ずしも節ごとに対応していないため、邦訳者の判断で一部統合した上で各節の冒頭に配分した。

(2) 底本ではしばしばローマ市が「the city」と表記されている。日本語では一般名詞としての「都市」やローマ市以外の都市と見分けがつきにくくややこしいため、ローマ市を示す場合は「都」と、それ以外の都市の場合は「都市」と訳し分けた。

(3) 本文中の〔 〕は邦訳者による補いで、（ ）は底本にあるものである。漢数字の注は底本にある（つまり英訳者による）注、アラビア数字の注は邦訳者による注である。

(4) 固有名の長母音と短母音は区別せず、長音は煩雑なので省略したが、人口に膾炙し、その表記の方が通りが良いと思われたものに関しては便宜主義的ではあるが長音を残した（カトーやブルトウス、ローマなど）。

(5) 本書の「オクタウィウスの策謀とアントニウスの復讐」という副題は邦訳者が独自につけたものである。

(6) 本書は学術的な貢献を期してというよりはむしろ邦訳者自身の一般的な歴史好きの知的好奇心に応えるために訳されたものである。邦訳者としては手を抜いたつもりは決してないものの、重訳である点、用いたテキストの古さ、一介の好事家に過ぎない邦訳者の資質等を鑑み、何らかの資料として用いる場合は他の資料、底本なりギリシア語原文と突き合わせることをお勧めする。

そして最後に。邦訳者の個人サイトでは翻訳活動支援の寄付を「投げ銭」の形で募っており、最終巻でまとめて挙げる予定の参考文献の購入資金の一部はこの寄付から支出されている。末筆ながら、趣味が高じて翻訳を進めるようになったこの一介の好事家の翻訳活動を、応援して下さった皆様に記して感謝申し上げる。

二〇二二年一二月 今居清綱

# 『内乱史』第3巻

## 第1章

1 ローマの支配地を拡大させた大立者のガイウス・カエサルはこのようにして敵対者たちによって殺され、人々によって埋葬された。彼の殺害者は全員罰を受けることになった。彼らのうちで最も卓越した人たちがどのようにして滅ぼされたのかはこの巻と次の巻で示されるであろうし、ローマ人による他の内戦の様相も同様にその中に含まれるはずである。

### カエサル葬儀後の都

2 元老院はカエサルへの追悼演説のためにアントニウスを譴責し、人々はこの演説によって最近通過したばかりの恩赦令を無視して殺害者たちの家に火を放とうとして都を駆けずり回るよう扇動された。しかし彼はある決定的な一撃によって自らに対する〔元老院の〕反感を好感に変えた。マリウスの偽物がローマにおり、名をアマティウスといった。彼はマリウスの孫だとうそぶき、これによって大衆人気を得た。この主張に則り、カエサルの親類だった<sup>(1)</sup>彼はカエサルの死を度を超して悲しみ、火葬用のやぐらの跡地に祭壇を建てた。彼は向こう見ずな連中の一団を集め、殺害者たちを絶えず恐れさせた。殺害者たちの一部は都から逃亡しており、カエサルその人から属州での命令権を受け取っていた者たちは、デキムス・ブルートゥスはガリア・キサルピナ、トレボニウスはイオニアに隣接するアジア、ティッリウス・キンベルはビテュニアといった具合で任地での任に就くために出立していた。元老院から特に目をかけられていたカッシウスとマルクス・ブルートゥスは、前者はシリア、後者はマケドニアという具合でカエサルによって翌年度の総督に選出されていた。まだ首都担当法務官だったので彼らは必然的にそこ〔都〕に留まっており、この職権を持っていた彼らは様々な法令で植民者たちの調停を行い、そしてこれまでは二〇年経過するまでは土地の譲渡が禁じられていたが、割り当て地の売却ができるようにした。

### アントニウスが偽マリウスを処刑する

3 アマティウスはブルートゥスとカッシウスを罠にかける好機を待っていたに過ぎなかったと言われている。この陰謀の噂を受け<sup>(2)</sup>、アントニウスは自らの執政官権限を行使してアマティウスを逮捕し、裁判抜きでの処刑に踏み切った。元老院議員たちはこの処置が乱暴で法に悖る行為だったために仰天したが、ブルートゥスとカッシウスの境遇はこのよう

---

(1) マリウスの妻はカエサルのおばだった。

(2) τῆς ἐν ἐδρας Ὀντωνίου ἐπιβάνων。これが「getting on to his game」〔彼の企みが分かる〕という我々のスラングの言い回しの語句と類似しているのは面白い。

な大胆さがなければ決して安泰ではなかろうと考えたために大いに喜んだ。アマティウスの一党、そして概して平民たちはアマティウスの件を遺憾に思い、この処置に憤慨したが、とりわけこれを行ったのが人々が敬愛し、どんな嘲弄もしないと決め込んでいたアントニウスその人だったからなおさらだった。彼らは大声を上げながら公共広場を占拠し、アントニウスへの非難を叫び、アマティウスに代わって祭壇を建ててここでカエサルのための最初の生け贄を捧げるよう政務官たちに呼びかけた。アントニウスが送った兵によって公共広場から追い出されると彼らはよりいっそう腹を立ててより大きな声でわめき、彼らの一部はカエサルの諸々の像が台座から取り払われた跡地を指し示した。自分はこれらの像が粉々にされた工房を指し示すことだってできると、ある人は彼らに述べた。他の人たちが続いて事実を証言すると、彼らはその場所に火を放った。ついにアントニウスは兵を増派し、抵抗した者の一部は殺され、他の者は捕えられ、そのうち奴隷は磔にされて自由民はタルペイアの崖から突き落とされた<sup>(二)</sup>。

アントニウスが元老院をたばかる

4 この騒擾はこのようにして静まった。平民のアントニウスに対する圧倒的な好意は圧倒的な嫌悪に変わった。ブルトゥスと彼の仲間たちはこれ以外のやり方では身の安全を確保できないだろうと元老院は信じていたので、元老院はこれを喜んだ<sup>(三)</sup>。またアントニウス

---

(二) キケロは『ピリッピカ』第1演説でこの詐称者の殺害についてアントニウスとドラベッラの共同行為として言及しており、残りの仕事はドラベッラ一人が行ったと述べている。しかしもしアントニウスがその場にいれば、彼は同僚に協力しただろうとキケロは述べている。ウァレリウス・マクシムスは、偽マリウスは馬の医者（エクァリウス・メディクス）で、本名はヘロピロスだったと述べている。「彼はガイウス・マリウスを自分の祖父だと言い立て、古参兵のいくつかの植民地、第一級の地位にある町々、ほぼ全ての地方都市が自分を庇護者にしたと自慢した。ヒスパニアで若ポンペイウスを片付けた後にカエサルが自分の庭園を人々に開放すると、カエサルから二本の円柱の間の空間だけ隔たった所にいたヘロピロスは彼自身と同じくらい熱狂的に群衆に歓迎されていたので、神の如きカエサルの力が恥ずべき暴動を收拾していなければ、共和国はエクイティウス（偽グラックス）の時と同じ損傷を受けていたことだろう」（ウァレリウス・マクシムス, IX. 15. 2）。

(三) テキストには日付がないので、我々は特定の時期にローマでの事態がどうだったのかに関しては混乱したままである。暗殺は3月の15日目に起こった。カッシウスとマルクス・ブルトゥスはローマにいては身の安全を守れないと見るやすぐにラヌウィウムに退いた。ガリア・キサルピナにまだ向かっていなかったデキムス・ブルトゥスが4月に彼らに書いた書簡は、キケロの書簡集の中に保存されている。自分はヒルティウスと会談し、兵士と平民は殺害者たちに対してたいそう腹を立てているからアントニウスは彼らの誰にとってもローマは安全な場所だとは考えていない、とヒルティウスが言っていたとキケロは述べている。彼は続けてこう述べる。「『それでは、君の考えはどうだ』と君は言う

スは、セクストゥス・ポンペイウス——大ポンペイウスの息子で、未だに誰からも愛されていた——はまだカエサルの副官たちと戦争中だったヒスパニアから呼び戻されるべきであり、彼は父の没収された財産に関して公費から五〇〇〇万アッティカ・ドラクマの支払いを受け<sup>(四)</sup>、海上の司令官に任命されるべきだという動議を提出した。これは彼の父が任じられていた役職で、当座の任務で必要だったために彼はいずこにある全ローマ艦隊であれ続括した。驚いた元老院はきびきびとこれらそれぞれの法令を受諾し、アントニウスを終日賞賛した。というのも彼らの評価では国家への献身では年上の方のポンペイウスに勝る者はおらず、彼ほど残念に思われていた人はいなかったからだ。ポンペイウス党であり、その当時は全ての人たちから称えられていたカッシウスとブルトゥスは自分たちは完全に安全になったと考えた。彼らは自分たちがしたことは承認され、共和国は最終的に再興され、彼らの党派は成功を勝ち得るだろうと考えた。そういうわけでキケロはアントニウスを絶えず褒め<sup>(五)</sup>、元老院は平民たちがこのために彼に対する陰謀を企んでいるのを察知すると、身辺警護の親衛隊を置くことを許し、都に住む古参兵から自分で選び取らせた。

アントニウスがカエサルの法令を改竄する

5 まさにこの目的のためならば、あるいは自分にとって頗る有用な幸運を掴むためならば手段を選ばなかったアントニウスは親衛隊を募り、人員の追加を続け、これは六〇〇〇人にまで膨れ上がった。彼らは一般の兵卒ではなかった。自分の下で働いてくれる後者〔即ち一般の兵卒〕は他の仕方でも簡単に手に入るだろうと彼は考えていた。彼らは皆、指揮に適任

---

だろう。運命に場を譲らねばならない。イタリアから退去せねばならない。ロドスかどこかよその地に移住しなければならないと思う。もし巡り合わせがよければ、われわれはローマに戻ってこられるだろう。ほどほどならば、追放地で暮らしていくことになる。最悪ならば、われわれは最後の最後まであらゆる方策を求めることになる」（『縁者・友人宛書簡集』, XI. 1）。

<sup>(四)</sup> キケロの『ピリッピカ』第13演説(5)ではセクストゥス・ポンペイウスに父の没収された地所への補償額として7億セステルティウス、つまり我々の貨幣での2870万ドルが議決されたとある。これはカエサルが死んだ時にオプスの神殿にあった額（没収された地所のあがり）とぴったり符合する（『ピリッピカ』第2演説, 37）。五〇〇〇万アッティカ・ドラクマは一〇〇〇万ドルとほぼ等しい。

<sup>(五)</sup> 『ピリッピカ』第1演説でキケロは、暗殺後の数日間自分はアントニウスに騙されたと白状している。その他の事柄の中にはアントニウスが提出した独裁官職を永久に廃止すべしという動議もあった。彼はこの目的のために文書で元老院決議を作成し、通過を期した。キケロが言うには「これが読み上げられると、我々は熱狂的に彼の意向に従い、元老院決議を行うことによって、彼に最高級の賛辞を表したのである」（『ピリッピカ』第1演説, 1）。

で、長期の戦争経験があり、カエサルの下での軍務を通して彼と知り合いだった百人隊長から構成されていた。彼が各隊から〔軍団〕副官を任命して軍装で飾り、彼らに栄誉を授けて彼の公務の諮問会議の参加者とした。元老院は彼の親衛隊の数〔の多さ〕と選出の用心ぶりに疑いを持ち始め、妬みを買うほど注目されないようにするため彼らを適当な数まで削減するよう彼に勧めた。彼は平民の混乱が鎮まればすぐにこれを行うと約束した。カエサルがなした全てと、彼が行うつもりだった全てが承認されることになることになると布告された。カエサルの遺志の覚え書きはアントニウスの掌中にあり、カエサルその人が出立する際にこの種の全ての申し立てをアントニウスの自由裁量に任せていたためにカエサルの秘書ファベリウス<sup>(2)</sup>はアントニウスのすることには何であれ従った。アントニウスは多くの人の好意を確保すべく多くの追加〔の贈与〕を行った。彼は諸都市、諸君公、そして自らの親衛隊に贈り物をし、この全てはカエサルの覚え書きが勧めていたことだったにもかかわらず、受取人たちはこの厚意がアントニウスのおかげだと了解していた。同様に彼は親衛隊に関する悪感情を招くまいとして元老院議員の一覧に多くの新しい人名を登録し、元老院の歓心を得るべく他にも多くのことを行った。

ブルートゥスとカッシウスが都を離れる

6 アントニウスがこれらのことで手一杯だった間、ブルートゥスとカッシウスは平民の中にも古参兵の中にも自分たちとの平和に傾いている者はいないと見て取り、他の誰かがアマティウスの陰謀と似たような陰謀を自分たちに企むことになるだろうと考え、軍を指揮下に置いていたアントニウスの気まぐれを最早信用できなくなった。共和国が諸々の処置で確固たるものにならなかったのを見て取ると、彼らはそれをも理由にしてアントニウスを疑った。三個軍団を擁していたデキムス・ブルートゥスに彼らは最大の信頼を置いていた。彼らはアジアのトレボニウス、ビテュニアのティッリウスに密書を送り、速やかに金を集めて軍を動員するよう求めた。彼ら〔マルクス・ブルートゥスとカッシウス〕はカエサルによって自分たちに割り当てられた属州を統治できるのか不安だったが、事を起こす時がまだ来ていなかったし、まだ終わってもいない首都法務官の職務を放り出すことは無作法だろうし、属州での権力を不当に延長しているという疑いを招くことになるだろうと考えた。にもかかわらず彼らは、我が身が安全ではない都で法務官として勤務するよりはむしろこの年の残りをどこであれ一市民として過ごすことを必要に迫られ選び、彼らが国家のためにもたらした利益に相応しい栄誉を手に入れられなかった。彼らがこのような心持ちであり、同じ意見を持っていた元老院は、彼らが属州の命令権を行使できるようになるまで世界全域から都への穀物供給の任務を与えた。これはブルートゥスとカッシウスがいつであれ逃げ出したと見られないようにするためであった。元老院が他の主たる殺害者たちに対し、主

---

<sup>(2)</sup> アントニウスに従ってカエサルの遺言にアントニウスの意に沿う内容を書き加えた。フルネームとこれ以外の事績は不詳。

として彼らのためにしていた心配と配慮はこれほど大きなものだった<sup>(六)</sup>。

ドラベッラがシリア総督に、アントニウスがマケドニア総督に任命される

7 ブルートゥスとカッシウスが都を去った後、君主も同然の権力を手中に収めたアントニウスは属州統治権と軍を得ようと企んだ。彼は何よりもシリアの統治権を望んでいたが、疑念を持たれている自分がこれを求めれば疑念はいつそう大きくなるだろうという事実が分からないわけでもなかった。それというのももう一人の執政官ドラベッラはアントニウスといつも対立していたために元老院はドラベッラをアントニウスに対抗するよう密かに励ましていたからだ。この若いドラベッラの野心を知ると、アントニウスはシリア属州と対パルティア人〔戦争〕のために徴募された軍を、その〔属州を割り当てる〕権限を持たない<sup>(七)</sup>元老院にではなく、人々に〔シリアをドラベッラに渡すこととする〕法を求め、要求してカッシウスに取って代わるよう彼を説き伏せた。ドラベッラは大喜びし、すぐに法案を提出した。元老院はカエサルの法令を無効にしたとして彼を告発した。カエサルは誰にも対パルティア人戦争を割り当てていなかったし、シリアの命令権を割り当てられたカッシウスその人こそ二〇年間の法定の期間の満了以前に割り当て地の売却を植民者に許すことでカエサルの諸法令に変更を加えた最初の人ではないかとアントニウスは応じた。また、もし自分がドラベッラ<sup>(八)</sup>で、自分がカッシウスの代わりにシリアに選ばれなければ、これを自分に対する侮辱とみなすだろうと彼は述べた。それから元老院は護民官の一人で、アスプレナス<sup>(三)</sup>という名の人を民会の間に空に兆しが現れたとでっち上げるよう説き伏せ<sup>(九)</sup>、執政官で鳥卜官であり、ドラベッラとはまだ不仲だと思われていたアントニウスが彼に味方するだろうと彼らは期待していた。しかし投票が行われ、アスプレナスが空に兆が出たと言うと、この仕事〔鳥占い〕は彼の管轄でないとしてアントニウスは彼の嘘に腹を立て、諸々の地区に

---

(六) 元老院によって食糧供給委員に任じられた時のブルートゥスとカッシウスはアンティウムにおり、キケロは彼らと協議しにそちらまで赴いた。催された協議にはブルートゥスの母、姉妹、妻が参加した。当初カッシウスはこれを侮辱だと述べて指名を嫌がったが、最終的には宥められ、両人は受けた(『アッティクス宛書簡集』, XV. 11)。

(七) οὐ γὰρ ἐξ ἡν. これは、シリア属州をドラベッラに割り当てる権能は元老院にはないという意味である。だが次の節ではマケドニア属州をアントニウスに割り当てるのが元老院の権限内であることを知らされることになる。元老院の権限は両者に拡大した、というのが事実である。コンブ・ドゥヌーは οὐを ἦに改めることで否定を肯定に変えることを提案している。

(八) これは彼と同じ地位にある人、任期が尽きようとしていた執政官である。

(三) アスプレナスという家名はノニウス氏族の分枝なので彼の氏族名はノニウスであろうが、彼の経歴については紀元前 44 年の護民官ということ以外は不明。

(九) こうなれば手続きは中断されたに違いない。

ドラベッラに関する投票を進めさせろと命じた。

8 したがってドラベッラはシリア総督兼対パルティア戦争司令官並びにカエサルがそのために徴募した軍及びマケドニアに先発していた軍の司令官となった。そうしてアントニウスがドラベッラと手を結んだと初めて知られるに至った。これらの仕事の人々によって行われた後、アントニウスは元老院にマケドニア属州を求めた。シリアがドラベッラに与えられたことを承知している以上は彼にマケドニアを、しかもよりにもよって軍のいないこの属州を与えないのは彼らの面目が立つまい。彼らは彼にマケドニアを渡すのに気乗りせず、同時にアントニウスがなぜドラベッラに軍を持たせたのか訝しんでいたものの、軍を保持するなら後者の方が前者よりもましだと思い、その気になった。彼ら自身はブルトゥスとカッシウスのために別の属州を渡すようアントニウスに頼む機会を捉えた。彼らは彼にキュレナイカとクレタを割り当てた。あるいは幾人かの言うところでは、この二属州はカッシウスに、ビテュニアがブルトゥスに割り当てられた。ローマの情勢は以上のようなものだった。

## 第2章

アポッロニアの若者オクタウィウス

9 カエサルの姉の娘の息子オクタウィウスはカエサルの騎兵長官に一年間任命されており、カエサルは時に毎年の公職をこんな風に友人たちに回していた。彼はまだ若者だったが、カエサルによって戦争の技術の教育と訓練のためにアドリア海のアポッロニアに送られており、カエサルの諸々の遠征に同行することになっていた。マケドニアから騎兵部隊が順番に訓練のために彼のもとへと送られ、ある軍幹部たちはカエサルの親戚だとして頻繁に彼のもとを訪れた。彼はその全員を懇ろにもてなし、彼らを通して彼自身と軍の間に馴染みと好感を醸成した。六ヶ月のアポッロニア滞在が終わる頃、カエサルが最も親しくしていてカエサルの下で当時最も有力な人物になっていた人たちによって彼が元老院議事堂で殺されたという知らせがある夕暮れに彼のもとに届いた。この蹶起が元老院全体が行ったものなのか、それとも直接手を下した者たちだけが行ったものなのか、彼らは人々によってすでに罰せられたのか罰せられることになっているのか<sup>(一〇)</sup>、人々が行われたことを喜んでいるの

---

<sup>(一〇)</sup> *καὶ εἰ δὲ κῆρυξ ἤδη τοῖς πλεῖοσι δεδωκοίεν, ἢ καὶ τοῦδε εἶεν*。全ての注釈者は最後の二語は改悪されたものだと一致しており、このままでは意味が通らない。数多くの校訂の推論のうちで、*ἢ καὶ δώσοιεν*、つまり「あるいは罰せられることになっている」というベッカーのそれが最も合理的であると思われる。この読みはこの訳文にも反映された。デイド版のラテン語版はシュヴァイグハウザーのそれに倣っている。「*utrum poenas jam populo dedissent interfectores, aut saltem*